

## <大会開催報告>

# 初年次教育学会 第10回大会 開催報告

大西直之  
中部大学

初年次教育学会第10回大会は、2017年9月6日(水)・7日(木)の両日、中部大学(愛知県春日井市)において開催されました。節目の第10回かつ東海地方で初めての開催となるこの大会を本学で開催できたことは大変光栄であります。当日は2日とも生憎の雨天となりましたが、皆様のご助力により大会を成功裏に終えることができましたことを心より感謝申し上げます。

大会への参加者は324名、うち事前登録者218名、当日参加登録が106名でした。賛助会員企業からの出展専従者4名と学内からの参加者(実行委員を除く)26名を加えた総数は354名となりました。プログラムは大会企画シンポジウムにおいて基調講演1件と実践報告4件、課題研究シンポジウムにおいて3名のパネリストからの報告と討論、ワークショップ7件、ラウンドテーブル4件、自由研究発表は10テーマ15部会で計53件の発表が行われました。賛助会員からの出展ブースは13社、また、本大会初の試みとして実施したランチタイムセミナーには7社10件の参加がありました。

大会テーマは「初年次教育と学生コミュニティ：授業内外で育む学びの成長」といたしました。大会テーマには具体的な教育方法や教育政策・答申などを意識した設定が考えられますが、今回は、社会を見据えた個々の成長を促す、という教育の本質ともいえるところまで掘り下げながら、学生たちの主体的な学びの発動(学びの成長)と社会全体までを含むコミュニティとのかかわり、特に大学初年次における学生コミュニティと学びとの関係といったところに焦点を当てたテーマを設定しました。そして第1日午後の大会企画シンポジウムにおける基調講演では、筑波大学の土井隆義先生に現代の学生・若者たちとコミュニティとのかかわりについて社会学の視点からお話いただき、続くシンポジウム第2部では基調講演の内容を踏まえた具体的な実践事例として、高校から大学へ、授業外(正課外)から授業内(正課)へ、そして最終的にはまた授業外へ、社会へ、といった流れを意識しながら、4名の登壇者の方々に実践報告を行っていただきました。詳しくは本誌掲載の記録をご覧ください。また大会テーマに関連して、第2日目午前にはラウンドテーブル「初年次授業におけるTA,SA等の役割：何を求め、どのように育成するか」を大会校の企画で実施し、さらに2日目午後のピアサポートの部会(自由研究発表)につなげるといった構成もプログラムの中に織り込みました。

大会のもうひとつの目玉として、第7回大会からの継続企画である課題研究シンポジウムがあります。本大会では第11回の記念大会に向けた流れの中で「3つのポリシーと初年次教育」と題し、カリキュラムポリシーとの関係、主体的に考えて書く力、などについて3名の研究担当理事からの報告と議論が行われました。この中では会員の皆様にご回答いただいて2017年春に実施したアンケート(初年次教育学会会員調査)について、山田礼子

理事より調査結果の分析と報告を行っています。お忙しい中で調査にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。またこちらにも本誌掲載の記事で詳細を是非ご覧下さい。

ところで、中部大学が位置する愛知県春日井市は名古屋市に隣接し、JR 名古屋駅で東海道新幹線を降りてから大学までは最短で40分ほど、中部国際空港からも約1時間の場所にあります。この地の利を考慮しますと本大会の参加者数(過去2番目に少ない)は残念ながら歴代大会の実績をかなり下回ったといえます。様々な要因が考えられますが、日程的な課題としては開催曜日を平日と週末のどちらにするか、これによって大学職員の参加の自由度が変わってくる可能性があります。今回は大会校の事情により平日の開催とさせていただきます。また、個人的な感触ですが、大会も10回目を迎えて会員のニーズが広がりつつあるように思います。本大会では大会テーマにもありますように、学生の態度変容といった、いわば個々の学生と相對する教育現場のミクロレベルの視点を大会企画の主題とした一方で、課題研究シンポジウムはカリキュラムとしての評価や教学運営全体にかかわる課題など、いわゆるミドル・マクロレベルの視点からの企画と位置づけています。しかし、2日間の大会日程の中で幅広いテーマを長時間のシンポジウム形式で扱っていくことには物理的な限界があります。その影響を受けた今回の大きな反省点として、時間的な制約からワークショップとラウンドテーブルのほとんどを並列開催したために参加者が分散した(平均参加者数16名、最大23名、最少10名)という問題が生じました。また2日目の自由研究発表終了時刻も遅くなっています。本大会では更に、賛助会員企業による情報発信の場として「ランチタイムセミナー」を初の試みとして昼休みに実施しました。賛助会員と一般会員双方にとって有益な情報交流の場を目指したのですが、やはり時間的な要因などから来場者が少なかったり大きく偏る(平均5名、最大9名、最少1名)といった課題が残りました。その他様々な事項を含め、大会をよりよく魅力あるものにしていくために、大会日程や企画、準備や運営のあり方を徐々に見直していくべき時期に来ていることを、「節目の第10回」を終了して強く感じました。

以上のように振り返ってみると様々な課題があるのですが、当日の運営そのものに関しては大きなトラブルもなく無事2日間の日程を終えることができましたのはひとえに参加者の皆様のおかげです。また第9回大会の谷川実行委員長、藤本新会長、安永前会長をはじめ学会理事や事務局の皆様方にも絶大なご支援・ご助力、助言をいただきました。あらためて御礼申し上げます。運営に関して付け加えますと、学内の実行委員は委員長を含めて教職員9名の「少数精鋭」とし、当日の大会運営の大半を32名の学生スタッフが担いました。大会テーマも意識しながら本学の元気な学生たちをアピールしたいという思いもありましたが、なにより学生たち自身にとって非常によい経験となりました。参加者の皆様から学生たちへの沢山のお褒めの言葉も嬉しく思いました。もちろん、教職員スタッフも含め、至らぬ点多々あったかと思いますが、どうかご寛容いただければ幸いです。

次の第11回大会はいよいよ学会設立10周年記念大会です。記憶が薄れないうちにと、第10回大会終了直後の昨年9月末には前実行委員長(私)、新旧学会長、事務局長が次期大会校である酪農学園大学に参集し、大和田実行委員長と共に大会引継・打合せのキックオフを行いました。札幌郊外の広大で美しいキャンパスの中で素晴らしい記念大会が行われることを祈念いたしまして、第10回大会開催報告の結びとさせていただきます。

(初年次教育学会第10回大会実行委員長)